

玉砂利

結城 文

山際に消えゆく機影を見送りぬ靴深深と砂に沈ませ

音たてて近づき来たるヘリコプター黒き影覆ひ翻りゆく

桜前線紅葉前線とふ情報に何か落ちつかぬ季節好まず

私が私に向かつていふ言葉さがして歩くヒメジオンの原

野をゆきてびつしりつきし草の実を一つ一つとるも楽しみのうち

人人の祈りに立てり半眼の奈良のみ寺の古きみ仏

危険とは隣り合はせと思ふ世の玉砂利の道にきしむ玉砂利

取り返しつかぬ不運のこともある良かれと思ひて選びし道も

叶はざりしことの数数夕暮れのが影法師となりてつきくる

世紀末のごとき街なり斜めさす夕べの光のビルの間の道